

特別支援学級の児童と通常学級の児童の心のつながりをめざして —道徳の授業を活用して—

渡 辺 智*

I. はじめに

小・中学校の学習指導要領が改訂され、総則に「障害のある児童などについては、特別支援学校等の助言又は援助を活用しつつ、例えば指導についての計画又は家庭や医療、福祉等の業務を行う関係機関と連携した支援のための計画を個別に作成することなどにより、個々の児童の障害の状態等に応じた指導内容や指導方法の工夫を計画的、組織的に行うこと。特に、特別支援学級又は通級による指導については、教師間の連携に努め、効果的な指導を行うこと。」と教師間の連携の重要性が示され、「障害のある幼児児童生徒との交流及び共同学習の機会」が強調されている（文部科学省, 2008）。

交流や共同学習の推進が求められる理由は、障害のある児童にとって集団生活を通じた社会性の育成が、自立した生活や就労に向けて重要であるからである。受け入れ側の通常学級（以下、文脈に応じて「交流学級」という表記をする）の児童にとっても、将来、地域社会の中で共に生活していく仲間として、障害者への理解や思いやりの心を育てることが重要であるからである。しかし、実際の交流や共同学習の場面では、様々な問題が現実的に起こっており、早急に解決すべき課題も多いと指摘（品川, 2009）されている。

特別支援学級（以下、「支援学級」）に所属する児童にとってみれば、支援学級から離れて交流学級に行くことは、コミュニケーションや社会性に困難さをもつために、精神的な負担になることがある。さらに、環境の変化への対応の苦手さや、見通しを持つことの難しさなどから、不安を感じることも多い。

制度として特別支援教育が始まり、支援の必要な児童がより豊かな生活を営む力を得るために、交流や共同学習の重要性がますます強調されている（砥柄, 2009）。

また、受け入れ側である通常学級の体制も大きく問われている。学級全体の規範意識が低く、児童相互の信頼、支え合いが乏しい状態であると、支援学級の児童を受け入れることには困難が伴うであろう。通常学級の担任が障害に関する理解が乏しかったり、支援学級の児童に対して否定的な感情を持ってしまったり、そして適切とはいえない支援を行ってしまうと、交流や共同学習が逆効果を招くといった事態も起こり得る。

* 甲府市立舞鶴小学校

本稿では、支援学級と通常学級相互の児童の心をつなげることを意図した道徳の授業の実践について、上記の筆者の課題意識をもとに考察を行うものである。

II. 実践の内容

1. 支援学級と通常学級の交流や共同学習について

支援学級の児童と通常学級の児童との間に交流の場をつくれば良好な人間関係を築けるであろう、と単純に考えることは危険である。障害のある児童が通常学級という大きな集団に入ることや、通常学級の児童が障害について理解することはきわめて難しい。交流や共同学習が、かえって相互の関係を悪化させることもある。その状態が続くと、支援学級の児童に二次的な障害を引き起こしてしまう。そのようなことにならないために、両学級の児童の実態を予め十分に把握して、必要な「環境」を整えることが大切である。その「環境」とは両学級の児童の「心」のありようではないかと筆者は考えている。

支援学級の児童については、基本的なルールを守ること、周りの状況に合わせて行動できること、自立した生活を送ろうとする意欲や態度を養うことが必要である。同時に通常学級の児童についても、学級の中で児童相互が支え合う関係を築くことができ、支援学級児童の障害についての理解し、それを受け入れることのできる力を持つことが大切である。

両学級の児童の「心」を育て、それを結びつける役目を果たすのが、紛れもなく、両学級のそれぞれの担任である。両学級の児童が、互いに良好な関係を築くためには次のような丁寧な手順が必要である。

- ・第1ステップ 支援学級の担任と通常学級の担任との間の信頼関係の構築
- ・第2ステップ 支援学級の担任と通常学級の児童との間の信頼関係の構築
- ・第3ステップ 通常学級の担任と支援学級の児童との間の信頼関係の構築
- ・第4ステップ 支援学級の児童と通常学級の児童との間の信頼関係の構築

2. 児童の実態について

筆者の担任する支援学級には、3名の女子児童が在籍している。知的発達の遅れは軽度であり、国語や算数などの学習は支援学級で行っているが、他の教科や日常生活、学校行事などの多くを交流学級で過ごしている。しかし、3名とも社会性やコミュニケーションに関する課題を持ち、学校生活の様々な人間関係の上で困難を抱えている。

交流や共同学習においては、両学級の児童の実態に応じて細やかな配慮が必要である。とくに障害の程度の軽い児童の場合、その障害が見えにくいために、関係をつくるのが難しくトラブルになることも多い。そこをどう克服していくかが、筆者の課題であった。

3. 指導の実際

(1) 道徳授業を支える事前の交流活動

①支援学級の児童から交流学級の児童へ

支援学級の存在そのものや支援学級の児童の頑張っている姿の表現として、以下のような取り組みを行う。

- ・劇「お手紙」の発表
- ・国語科：文章読解や台詞練習
- ・生活単元学習：舞台装置や衣装の作成など劇を成功させるための準備
交流学級の児童の招待など

②交流学級の児童から支援学級の児童へ

支援学級の児童への励ましや共に生きる心の育成を図るために、以下のような取り組みを行う。

- ・「お手紙」観劇
- ・感想の発表・ビデオレターの作成

(2) 道徳授業を活用して

①支援学級の担任から通常学級の児童へ（障害者への理解，支持的な学級風土の育成）

- 主題名「励まし合う友達」
- 資料名「いいち、にいっ、いいち、にいっ」
- ねらい クラスの中で弱いお友達を理解し、助け合っていこうとする態度を養う。
- 学習内容 どんな人でも弱さがあること。
おそい人に合わせればみんな幸せなこと。
困ったときに助けてくれるのが本当の友達であること。
- 授業者は支援学級の担任である。

②支援学級の担任から支援学級の児童へ（社会的なスキルの獲得）

授業の主題名やねらい、授業の様子については以下の「指導案」「授業資料1」「授業資料2」「研究会での指導助言」に記す。

-----以下、指導案-----

○○学級道徳学習指導案

指導者 ○○学級担任 渡辺 智

- 1 主題名 「たすけあい」 2- (3) 友情・信頼、助け合い
- 2 資料名 「こころのにじ」（出典：学研編集委員会・長谷川節子作）
- 3 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値

特別支援学級在籍の児童にとって、交流学級児童との人間関係作りは大変難しいものである。しかし小学校時代、「友達っていいものだ」という感情が育つこの時期に、仲良くすることの心地よさや安定感を実感できるようにすることはとても大切である。また、仲良くするためには、相手の身になって考え行動することが大切であり、友達が喜ぶ姿を見て、ともに喜びを分かち合う態度を育てていきたい。

(2) ねらいにかかわる児童の実態

本学級児童3名は、共に友達同士のコミュニケーションに困難を持つ児童である。相手の気持ちを考えたり、思いやったりすることは未発達で、まだ自己中心的な行動が多い。交流学級での活動も広がり、様々な場面でお互いの意思疎通が図れず、トラブルになることも多い。そのようなトラブルをどう回避していくか、一つ一つの事例について繰り返しその方法を学んでいく必要がある。

(3) 資料について

転んだまみさんを見かけて、ドッジボールをしていたひろくとえみさんは少し迷うが、まみさんを助けて保健室へ連れて行く。困っている友達を見かけた場合にどうすることが大切かを考えさせ、「こころのにじゲーム」をすることで、他者を思いやり、行動することのよさを体験し、実践しようとする意欲・態度につなげたい。

4 本時のねらい

交流学級のお友達と仲良くし、助け合おうとする気持ちを深める。

5 展 開

課程	学習活動と主な発問	学習の様子を見取る視点	指導上の留意点
導入	(1) 交流学級のお友達とのことを思い出し話し合う。		
前段	①国語の時間に学習し、交流学級のお友達の前で発表した「お手紙」の劇のことを思い出す。	・自分たちが頑張ったこと、見たお友達が喜んでくれたことを想起できる。	・「お手紙」の劇を演じたときの写真を提示し、交流学級みんなが喜んでくれたことを思い出す。
	②交流学級のお友達との関係の中で嫌だったことについて発表する。	・交流学級で経験した「嫌だったこと」を発表できる。	・事前にかけておいた「交流学級で経験した嫌だったこと」を発表する。
後段	(2) ソーシャル・スキル・カードを用いて、お友達とのトラブルにはどんなことがあるか考える。	・相手が自分の思い通りに対応してくれなかったとき、自分にも原因がないか振り返ることができる。	・「ソーシャルスキルカード」を用意する。
	(3) 資料「こころのにじ」を読んで話し合う。		
	○転んでいるまみさんは、どんな気持ちか。	・「痛いよ」「だれか来て」等まみさんの立場になって考えている。	・場面のカードを用いて文章だけではなく視覚的にも物語が理解できるように配慮する。
	○転んだまみさんを見たひろくとえみさんはどんなことを思ったか。	・「まみさん痛そう。助けに行かなければ」という気持ちと「今、ドッジボールが楽しいところだけだな。」との迷いを正直に見つめることができる。	・転んだまみさんに対してどうするか話し合う。ドッジボールを続けたい気持ちと心配する気持ちとの葛藤を押さえる。
	○二人に助けに来てもらったまみさんは、どんな気持ちになったか。	・「嬉しい。優しい友達がいてよかった。」「痛みが小さくなってきた。」等自分が助けてもらったときのことを考えながら発表できる	・相互の気持ちが通じて友情が深まったことを押さえる。
○石井先生が「三人のこころに、すてきなにじがかかったようですね。」とおっしゃったのは、どういう意味か。	・人の心と心が結びつくことの良さを「にじカード」を黒板に貼ることで感じるができる。	・「にじカード」を用意し、貼らせていく。	
	(4) 「こころのにじ」ゲームをすることで、助けられたり、助けたりする体験をする。	・心のにじゲームのルールを知り、役割を交代しながら、登場人物の気持ちになりながら役を演ずることができる。	・親切にされることや親切にすることの良さを体験し、それに共感できるようにする
	○ゲームのやり方を知る。		
	○ゲームをして助けられたり、助けたりしたときどんな気持ちだったか。	・＜助けられたとき＞の「よかった」「相手を優しいなと感じた」などの感情を持つことができる。	

終末	<p>○「こころのにじ」は、どんなときに、わたしたちの心にかかるか。</p> <p>(5) 交流学級のお友達からのビデオレターを見て、お友達を仲良くすることの心地よさを感じ明日から取り組んでいくことを確認する。</p>	<p>・<助けたとき>の「相手が喜ぶ姿を見てうれしい」等の感情を持つことができる。</p> <p>・交流学級のお友達と「こころのにじ」がかかったことを実感している。</p>	<p>・友達を思いやり、互いに助け合う場面はいろいろあることを知り実践しようとする意欲を高める。</p>
----	---	--	--

6 本時の評価（期待する姿）

交流学級のお友達と仲良くすることの大切さ良さを感じ、互いに助け合っていこうという気持ちを深めることができた。

7 事前・事後指導

国語科の「お手紙」の学習で劇作りをし、交流学級で発表し、人に喜んでもらえることの良さを経験させる。（招待状を作ったり、劇の感想を書いてもらったりしておく）

交流学級の道徳の時間に、障害のことや障害をもつ人と共に生きていく大切さについて教え、支援学級児童と共に学習することの良さを伝えておく。

――以下、授業資料1（交流学級の児童から支援学級の児童への感想）――

お手紙の劇を見て 3年 (○○○○)

○劇を見ておもしろかったこと

小せなかつむりがうごいてこんなくふつむりがあるところがおもしろかった。

○役者さん（ゆきえさん、あみさん、いつきさん）に一言お願いします。

ふわあいがうきうのみんながしかりわりをばたしてあまに、せりふをしっかりとおぼえていたことがすごいなと思った。

お手紙の劇を見て 3年 (○○○○)

○劇を見ておもしろかったこと

かたつむりが出てきてかえるくんのお手紙をとどけるところがおもしろかったです。

○役者さん（ゆきえさん、あみさん、いつきさん）に一言お願いします。

すてきなけきを見せてくれてありがとうございます。わたしは、せりふをおぼえてすごいいい思いました。これからもがんばってください。

お手紙の劇を見て 3年 (○○○○)

○劇を見ておもしろかったこと

全部おもしろかったけれど、とくに、始めのかえるくんか、かまかえるくんの手紙を書くところか、やさしいかえるくんはと思いました。

○役者さん（ゆきえさん、あみさん、いつきさん）に一言お願いします。

声の大きさ、しよげんが一番よかったです。

お手紙の劇を見て 3年 (○○○○)

○劇を見ておもしろかったこと

かえくんかかまかえるくんの手紙を出すのがおもしろかった。

○役者さん（ゆきえさん、あみさん、いつきさん）に一言お願いします。

きむちがちゃんとしたわって来た。と増え人物の

————以下、授業資料2（授業の場面）————



「かたつむり君このお手紙がま君にとどけて」「まかせてくれよ」



「このお手紙、僕が出したんだ。きみの親友、かえる」



3人で役割を交代しながらの「ころのにじ」のロールプレイ。



交流学級のお友達との間に「ころのにじ」がかかりましたか？

————以下、研究会での指導助言————

- ・劇を見て感動した。授業も参観するものにとっても楽しかった。
- ・劇をするためには模倣が基本であり、それを繰り返すことによって、自己が入り込み、心情を共有し、豊かに表現できるようになっていく。さらに表現したことを褒められ認められ心身共に高まっていく。たくさんの人々の拍手は、子どもたちに大きなエールとなったであろう。
- ・特別支援学級と交流学級の間に、素敵な虹がかかった。
- ・子どもたちの心情を扱う場合、指導案等でも言葉使いに注意したい。道徳はただ授業での教師の指導だけではなく、違うところからの高まりも大きい。
- ・「思いやり」ということも、もしそれが強制的になっているならば無意味。注意が必要。
- ・特別支援学級の中でも道徳指導が行えるということを実感し、勇気づけられた。
- ・「交流はいいことだ」という前提には疑問を持たなければならない。無理な交流は考えなくてはいけない。交流は行くばかりではない、来てもらうことも大切では。
- ・ソーシャルスキルがもてはやされているが、技術的に社会性を身につけさせることは大変難しいこと。なぜ特別支援学級の児童ばかりがそれを要求されるのか。大人が良き見本を見せていくことが、社会性の育成、お互いの理解につながるのでは。

- ・劇を使って、心情を言葉にさせることには限界がある。過度な期待は禁物である。
- ・クライマックスの「虹がかかる」のところで言葉の意味を理解していなかった。丁寧な「言葉」の指導が必要である。
- ・3人の児童は良く活動していた、他人を意識できるということは素晴らしい。

Ⅲ. 結果と考察

1. 道徳の授業の活用

支援学級の道徳の授業は、交流学級の道徳に参加したり、道徳という時間を設定せず生活単元学習の中で扱うことも多い。本実践は、支援学級において道徳を設定し、道徳の副読本を使い道徳授業の手法（ロールプレー等）を用いて授業を行った。資料選定に当たっては、様々な出版社の副読本を手に取り、児童の実態に即した内容のものを選んだ。道徳副読本の中には、障害をテーマにした内容のもの多数あり、支援学級児童の交流活動に関わる学習に活用できるものも多い。

ただし、3名の学級児童数では授業の進め方や深め方の部分で道徳として成立するかは不安であった。3名の児童は人間関係を築くのに困難をとめない社会性の育成が必要であると考え、交流学級の児童との関係改善という目的もふまえながら、他教科の授業も関連させながら授業を行っていった。（国語科「お手紙」の授業の活用）

2. 社会性の育成について

支援学級内の児童の社会性の育成については苦慮している。支援学級内で、視聴覚教材を駆使して道徳の授業を通して考えさせたり、交流学級の道徳の授業に参加して、心の対話ができるような経験をさせたりしている。今回の授業でもソーシャル・スキル・トレーニング的な内容も随時取り入れ、人間関係の様々なパターンについて児童に体験させていくことが大切であると考えている。

3. 劇化することの効果について

「音読」と「朗読」の違いがあるように、「動作化」と「劇化」にも違いがある。劇化することにより、間接的ではあるが自分なりに主人公の気持ちに寄り添うことができ、主人公の気持ちを考える手がかりになった。また、劇化そのものに興味を持ち、授業全体に意欲的に取り組めたことも良かった。支援学級の中には劇が好きで、やりたがる児童も多いので、様々な授業場面で活用できると思われる。道徳の資料の中には、支援学級児童に有効なものが多いが、学年の枠にはとらわれずの児童の実態にあった資料を利用することが望ましいと思う。

4. 交流の中での指導（交流学級の児童への指導）

今回は、事前に交流学級の道徳の授業をしたり、交流学級の児童を招待して劇を披露したりしてお互いの意識を高める工夫をした。交流に当たっては十分な配慮が必要だが、近頃、通常学級の方の集団力が著しく低下していることが感じられる。

受け入れ体制が整っていないところへ、支援学級の児童が入っていても、かえって寂しい思いをしてしまうこともある。通常学級の指導なしには十分な交流はできない。通常学級担任との連携のもと、両方の学級の指導が大切である。

IV. 成果と今後の課題

特別支援学級の道徳の授業、および関連する教科の中に、劇やロールプレイを取り入れることにより、主体的に課題に取り組むことができるようになった。主人公になったつもりで気持ちや行動を理解する手助けとなり、人前で演じ大きな拍手をもらうことで大きな自信を得ることができたことは大きな成果だった。劇やロールプレーを活用することから発展させ、日常生活の中でどのように他の人々と関わっていけば良いか、経験を通して汎化させていくことも重要であり、日頃の交流活動の充実を図っていく必要がある。

また、教師側にとっても自分を表現することの得意な児童と、そうでない児童についての実態を把握できた。国語の「お手紙」の劇、交流学級児童への発表、交流学級での障害についての道徳の授業、そして今回の道徳授業と、一連の活動を仕組むことにより、児童相互の関係がより深まり、日頃のトラブル克服への意欲や方法について知る機会となった。

また、道徳の授業を中心とした指導が、交流活動を活性化させ児童の社会性を育成することに効果を持つとしても、それをどのように支援学級の教育課程の中に位置づけていくかも課題となる。道徳を取り出して指導するのか、合わせた指導の中で取り扱っていくのか、支援学級での道徳の授業時数と通常学級での授業時数をどの程度の割合で持つのか、資料の選定はどうするか、道徳の徳目の配分をどうするか等々、計画的で効果的な指導課程編成と題材構成が求められる。

支援学級と通常学級の交流に関しては、支援学級における、ソーシャルスキルトレーニングの必要性はあるが、通常学級における、お互いを認め合う学級風土作りも大切であることが改めて確認された。本稿の中で示された、交流学級と支援学級のそれぞれの担任・児童相互の関係づくりを、ステップを踏んでさらに丁寧に行っていく必要がある。

このように、支援学級と通常学級の各担任相互の連携に努めていく必要があるが、学校全体としても共通意識を持つことが重要である。道徳の授業等を活用して児童相互の交流の活性化させたり、道徳的実践活動を充実し児童の意識を高めたりすることも、学校全体の取り組みによってさらに支えられていくと考えられる。

文献

- 1) 文部科学省（2008）小学校学習指導要領解説－総則編－．文部科学省．
- 2) 品川裕香（2009）通常の学級の特別支援教育に期待すること．特別支援教育研究，621，5-7．
- 3) 砥柄敬三（2009）小・中学校における特別支援教育．特別支援教育研究，620，26-29．